

長崎の二つの闘いから「いま」を見る。

月刊誌「地域と労働運動」4月号掲載分です。

2014/3/20

郵政産業労働者ユニオン長崎、
中島義雄

、朝三暮四の官製春闘。

「『官製春闘』六年ぶりに有額回答で決着」という三月十三日のマスコミ報道を見て、私は、中国の「朝三暮四」という故事を思い浮かべていた。

中国の春秋時代、猿をたくさん飼っていた狙公という老人がいた。しかし猿が増えすぎ、餌代にも事欠くようになる。そこでそれまで一日八個だった餌のどんぐりの実を七個に減らすために、猿に「今日から餌を朝三つ、夕暮れに四個とする」と言った。するとサルたちは朝三個では腹が減ると騒ぎだした。しかし狡猾な老人は「では、朝に四個、暮れに三個でどうか」提案を変えたら、猿たちはこれを喜んだ」という。最終的には減らされるのだが、目先を変えられて、猿たちはだまされたことを嘆う、古来からの寓話だ。

この猿を現代の労働者に例えるならどうだ。私は三月一八日の郵産ユニオン長崎中郵支部のストライキ突入集会（長崎中郵門前）の中で、これを引用し、「日本の労働者は猿以下か」と怒りの発言を行った。

安倍首相は大企業に賃上げを求め、その代わりに法人税を引き下げ、そして消費税を三%引きあげて八%とする、としている。最初はベアを受け入れないとした大企業はしぶしぶというポーズを見せながら、六年ぶりの有額回答へと方針を変え、安倍首相も企業も、国民の苦しみを理解していると猿芝居をうった。するとどうか。連合やマスコミもこれを歓迎し、二〇一四年春闘は決着となった。私はこれに怒ったのだ。

比較的高額な有額回答のトヨタの三千元のベアで、労働者は年間四~五万円のアップである。無論、正社員だけだが。では消費税の三%アップではどうか。仮にその家族が年間二百万円を消費をすとして、消費税（三%）は六万円となる。差引き一万円の赤字である。郵政の正社員の有額回答は千円であった。年収は一万六千円上がる。差引き四万四千円の赤字である。にもかかわらず、低額ベアを喜んで受け入れる人たちは、サル山の猿と同じだと思う。

中国の春秋時代はいまから二千五百年も前で、有名な孔子のころだ。そのころも国民をだます、ずるがしこい皇帝がいて、国民はすぐに騙され、支配を受け入れてきた。そしてそれを語り継ぐ有名な寓話が「朝三暮四」である。そこで、これを学んだはずの、現代の人たちだ。知力も歴史的な世界観も持つはずの人が、こと会社のこととなると、なぜこのように、愚民と化するのだろうか、いまも不思議である。支配と被支配は人を無知にさせるが、これがその典型だ。前書きがやや長くなったが、私にとって今年の春闘の最大の

関心事がこれだと思うからだ。

、郵政のベア回答は非正規に冷淡。

三月一八日、郵政産業労働者ユニオンは、全国一二都府県、二八の職場で始業時から一時間のストライキに入った。民営化後、七年目になるが、東日本大災害の年に中止をした以外、連続のストライキであり、長崎も五回目のストライキである。今回の長崎のストライキの特徴は、参加者が六名と少なかったが、なによりもそのうち三名が非正規の仲間のスト参加だったことである。これは、長崎でも初めてのことであり、まさに次の時代の到来を告げる画期的な闘いであると考えている。

郵政産業労働者ユニオンは二月に、期間雇用社員の時間給一律二〇〇円アップと社員月額二万円の賃金引き上げ、正社員化、均等待遇、大幅増員などを求める要求書を会社に提出し、六度の本社交渉を行ってきたが、会社は三月一四日の夜、月額千円引き上げ（正社員のみ）を最終回答としてきた。期間雇用の非正規労働者（二十万人が全八ランクに段階的に分類されるが）の一段階だけ、会社内用語で、「スキルA習熟度なし」の人だけに、時給一〇円アップとしてきた。ランクごとの人数を会社が不公表としているために、私はその数を把握していないが、非正規全体ではなく、一部の人だけの時給を上げることになる。というのは、会社は去年、このランクの一つ上のA習熟度ありだけ、十円アップを行っているからだ。

三月一三日、参議院で質問に立った福島瑞穂議員（社民党）は、「郵政の六万人を正社員にする」とした担当大臣などの約束はどうなった。会社は二四人も顧問を抱え、二億円も使っている。もっと社員の処遇を改善すべきだ」と会社と総務省を追及した。郵政の発表された現実、非正規率四七%で、賃金は正社員（管理者を含み）年収六百六万円、期間雇用者は八時間計算で、年収二百二十七万円と三倍の格差である。彼らを置いてきぼりにして、正社員と一部期間雇用者だけのベアだけで納得できるはずはないのが、普通感覚だろう。しかし、企業内多数派のJ P労組はこの春闘の有額回答を「成果」として受け入れた。しかも、この四月からさらなる成果主義賃金の限定正社員や、新業績手当などが始まる中にある。

だから、郵政産業労働者ユニオン中央闘争委員会は、この郵政の最終回答を非正規・期間雇用社員への事実上のゼロ回答だとして、全国にストライキを指令し、三月十八日のストライキ決行となったのである。スト拠点は二八職場の七一人で、非正規・期間雇用者のスト突入は三拠点で、長崎を含み八名であった。

、闘いはスト権投票から始まった。

三月一八日、スト当日、朝は曇りの予報に反し、やはり「長崎は雨だった」。

集会が始まった七時半、長崎中郵の門前には、一〇団体、三〇余名の支援者が集まった。司会のマイクを握る山田書記長は、「今回のストは非正規の仲間三名が参加している」と彼らを紹介し、六人全員がストライキ突入の決意を語った。参加者一同も、今年はなにかが違おうし、半官半民の郵政だから「の

んびりストが打てる」と内心揶揄（？）していた支援の人たちにも、今年の異様な雰囲気、私たちの本気度は確実に伝わったようだ。

二月のスト権投票のとき、長崎中郵支部の執行委員会は、スト権投票に参加する二〇数名の非正規の仲間にかこう言った。「これまでは正社員のみがストを打ったが、もしスト権確立の批准がなり、長崎に拠点要請がきたら、『それぞれがストライキに入るぞ』という責任感をもって賛否の投票をしてくれ」と。結果は支部で八割のスト賛成率であり、非正規労働者の怒りは本物であり、限界にきているのである。

こうした事前の粘り強いオルグなどから、非正規者の三名がストに入ったのである。私は全国の様子は知り得ていないが、長崎で三名もストに入ったのは初めてである。郵政の期間雇用社員の多くは、半年契約の人たちである。今会社も期間満了だけではユニオンの仲間を簡単には雇止めにはできない。二〇一二年一〇月の最高裁で雇止め無効を勝ちとった岡山支部の萩原裁判判決の結果だが、しかし、様々な嫌がらせや攻撃はいまも続いている。いつなにか、狙い撃ち的に解雇攻撃がからないと限らないのは、正直なところだ。

、非正規者のストのもつ意味。

こうした中、支部は、ストを理由に解雇が起きれば、全国が支えて闘うと彼らを励まし、彼ら彼女らもストに入ることとなった。私自身は、正社員しか経験がなく、ましてや退職者だ。正直、非正規雇用の不安さは、実感できない。それだけに彼ら、彼女らの勇気は称賛に値する。まさに生活をかけて、家族ともども、この運動に賭けるという思いなしに、自らスト参加に手を上げることはできない。ストを前に、彼ら、彼女らにも深刻な心の葛藤があったと思う。私はいま、今年のストにより、郵産ユニオン長中支部の運動に、新しい一ページの歴史的「闘い」の扉が開かれたと実感したし、言葉にできないほどの感動をもった。

雨に打たれながらも笑顔を見せながらスト集会に参加した若者たち。彼ら彼女らの明日に、今後だれが責任をもって、ともに闘っていくのか。これが問われている。スト集会に参加した私は、本心から、雨の中のストもいいものだ、と拍手をした。

ようやく一時間半の門前集会の最後、怒りのシュプレヒコールが終わり、九時、就労だ。郵便労働者にとって雨は天敵。雨の中の仕事は辛い、ストを打ち抜いた快感が彼らの心を支えている。みんなの拍手に送られ、スト参加者は仕事に入った。

確かに、倒産の心配のない郵便局だからストが打てるという声も聞く。赤字でも首にならない会社で働く者のおごりだとも声も耳にする。また少数でストを打ってもいったいどんな影響があるのか、などなどの声も聞く。しか

し、今回はこうした指摘を、「では恵まれている正社員はどうなのだ」という立場で、非正規の仲間が存在をかけた、声を上げたことではねのけたと思う。こうした小さいけれど確かな一歩が、いつの時代も、次の闘いの道として切り開くからだ。

二〇〇七年十月の郵政民営化前の郵政ユニオンのころの二〇〇六年、郵政ユニオンは広島県呉市で全国大会を開いた。その前年から郵政ユニオン長崎は一〇名ほどの非正規労働者を組織して、そして、彼らに言った。「一緒に広島の全国大会に行こう」と。そして勇気ある若者七名が全国大会の演壇に立ち、決意表明を行うさまは劇的なシーンだった。非公然という覆面を、全国大会の場で脱ぐ彼らの勇気ある行動に触発されて、全国は一気に非正規の組織化へと入る。そして八年、いまや組織の半分は非正規の仲間だ。誰かが、どこかで、いつかは、決意ある行動と闘いをはじめないと、次は来ない、という歴史体験を長崎は持っている。今回もこうした自信がみんなの胸にある。

、非正規者が立ち上がれば時代は変わる。

非正規、期間雇用労働者が全体の四割、三千万人を占める日本社会である。郵政も過半数は非正規という異常な実態だ。これをおかしいと誰もが感じ、なんとかしなくてはと思いつつも、だれも変えきれない現実の壁は厚い。しかし、たった三名のストだが、非正規雇用を打破するためには、こうするのだということ、行動で示した闘いの典型が、三・一八ストである。幾百の言葉より、端的でわかりやすい。

仮に、いま郵政の二十万人非正規の人たちが、一日でも職場を放棄し、実際にストに入れば、会社の日常業務は完全にマヒし、誰が会社を支えているのが明らかになるのだ。無論、組合に対する社会からの批判も強まる。そして、この闘いには反動も起きるだろう。もしかすると、国鉄改革（解体）やJALみたいに、偽装倒産的な会社の再建、全員解雇攻撃もかかるかもしれない。しかし、これは現代の最大の不条理=非正規制度を解体するための、唯一無二の闘いであり、これ以外に方法はないのだ。

そしてこれを現実に実行し、課題を証明して見せたのが「三・一八長中支部の非正規者の三名のストライキ」だったと思う。非正規労働者の身分解放は自らの闘い以外にないと決意した人たちが、少数ながらも存在するのだ。がんばれ、非正規の若者たち。そして全国は、こうした勇気ある人たちを支える陣形を早急に作り上げ、みんなとともに闘い、二十万人のストへ向かい始めるべきではないか。

こうしたことをととても無理だと思ふ人たちこそ、まず、自らの職場で、自らの組織で、現実を変えるための意識を洗い直すべきではないのか。新しいレベルの闘いの困難性は、組織性や周囲の労働者の質にあるのではなく、労組活動家として長く生きてきた現在のトップ、その指導者たちの経験主義か

らくる保守的な「組織防衛」「現状維持」に迷い込んだゆえである。したがって、困難性はその人たちの、心の内部にこそあるのであり、非正規の若者のストは、その人たちの意識と存在を乗り越える、可能性ある具体的な目標＝幟旗となる予感がする。

、初めての西日本春闘討論長崎集会開催。

このストに先立ち、二月二日～二三日に長崎で初めて開く西日本春闘討論集会の呼びかけで、長崎は、今春闘はアベノミクスの労働破壊との対決と、それを企業特区的に先取りする郵政内の闘いがテーマだと書いた（本誌二月号）。

幸いにして、全国の労働者が組織を超えて結集し、集会には、一一都府県、二二労組、百二十四人が参加してくれた。主催者としては、これほどの喜びはない。長崎集会は二〇年来の課題であったが、地元の長崎の環境が整わず、これまで幾度も流れてきた経過がある。理由は、長崎の全労協労組の意識統一がならなかったからだ。しかし、今回は、そんなことにこだわってはおれない時代の到来が、長崎集会の背中を押した。内部でもめているときではないのだ、ということが、集会決断のきっかけとなった。

、長崎は労働運動発祥の地。

そして、全国は新しい長崎に期待し、結集してくれた。感想はというと、「長崎は遠い」であった。交通も不便だし、新幹線もない。第一、大村の空港から長崎まではバスで一時間ほど、福岡からJR特急で二時間もかかるのだ。これは九州も広く、日本の西の果、西海道は、なお遠いのだ。しかし当日の集会会場となった長崎地区労会館は人があふれ、熱気ある集会となった。

最初に集会実行委員長の郵政産業労働者ユニオン長崎中郵支部の高口美和子支部長が「全国から駆つけてきてくれてありがとう」と地方開催らしい挨拶から始まった。

長崎は、一八九七（明治三〇）年に労働組合期成会を立ち上げ、日本労働運動の父とされる高野房太郎出生の地である。また、明治のはじめ自然発生的とはいえ、長崎三菱高島炭鉱労働者三百人が賃下げに抗議し、グラバーが興したこの炭鉱の経営者＝外国人が住む施設を打ちこわす暴動を起こす。この鎮圧のために国と会社は軍隊を出動させた。これは日本労働運動史にも最初の組織的闘いとされる（大原社会問題研究所編の社会労働運動大年表から）。

この長崎港外の三菱高島炭鉱や端島炭鉱（軍艦島）で長く働き、落盤事故で首まで生き埋めとなりながらも九死に一生を得た人が、高口支部長の父親である。現在も九〇歳の高齢だが存命であり、自身が炭労で闘った歴史をもつだけに、いまも「労働運動をがんばれ」と彼女を応援してくれているそうだ。

また彼女自身も短時間社員という二年契約の非正規雇用の集配外務労働者（郵便屋さん）という厳しい労働環境下で毎日を働いていて、郵産ユニオンの中央本部執行委員を兼ねている。集会前には全国を飛び回り、多方面に集会参加を呼びかけてくれた。その結果の集会参加一〇〇人超えで、当然、集会のあいさつにも熱がこもった。

、基調報告で労働破壊との闘い。

集会の基調講演では、大阪労働者弁護団所属で、現在、長崎県諫早市の諫早総合法律事務所に所属する三二歳の若手弁護士、中川拓さんが、「アベノミクスの労働破壊との闘い」というテーマで奥深い講演をされた。彼は、「労働者のみなさん！太変なことなのですよ」と、労働破壊の中身を具体的に話された。

事実、「日本の雇用が危ない」(安倍政権の「労働規制緩和批判」)という本を緊急出版された八人の労働法学者の中の主筆、西谷敏大阪市立大学教授は、この労働破壊について「他の先進国であれば、抗議のゼネストが起こっても不思議はないと思われる事態であるが、日本ではその気配もない」と危機感をあらわにされている、重大な問題なのである。

無論、この西日本春闘討論集会成功の呼びかけに応じて、全国の郵政労働者は五〇名に近い仲間たちが結集した。彼らの危機意識も強い。それはこの四月から始まる新人事制度で、限定正社員が取り入れられるからだ。これを非正規社員の正社員化に道を開く「良い制度」として、多数労組がこれを認め始めた苛酷な制度である。

西谷教授によれば、限定正社員はそれ自身と、それを目指せとされる非正規社員への不当な処遇による差別的攻撃であるが、一方の正社員を無限定正社員として位置づけ、まさに文字通りの限定無き忠誠を会社に誓わせる、攻撃ともなると指摘する。例えば無限定の残業義務、限定無き勤務地、郵政でいうと全国一社であるから全国どこへでも配転命令が出せ、これに従わなければ解雇という最高裁判例に基づき、自由解雇が可能となるものだとする。してみれば、限定正社員制度とは攻撃の本丸は正社員ではないかと、いまようやく気づくが、これはもう始まっているのだ。

郵産ユニオンの全国はこうしたことから、西日本春闘討論集会に全力で集まり、春闘の健闘を誓い合った。その延長が三・一八春闘ストであり、二八職場のストが、西日本春闘討論集会の成功からつながったのである。本来、春闘討論集会は一緒にストを闘うための意識まとめの集会であった。しかし、いつしかストなし春闘になり、この討論集会も形式的に、また、参加者に熱気が感じられなくなったものが多くなり、いわば帳面消しの催しとの感があった。長崎集会はこれを春闘活性化の一つとして取り組んだ。熱気はそうしことの反映だった。

、先輩労組の意志は引き継がれている。

一方、本集会の片方で、地域の先輩労組で、我が郵政産業労働者ユニオン長崎の兄弟組合であった長船労組が昨年一二月に解散され、この長崎集会にも参加してもらえなかった。こうした状況から、私が長年の運動の中で、いつも教示を仰いできた大阪の先輩から、集会欠席のお詫びと、長年の思いが寄せられた。文中には、時代の変遷とはいえ、組合の終わりと、次の運動実

践と自世代への提言の場に、それらの組合名がないことの寂寥感が述べられていた。七〇年代、八〇年代をともに闘ってきて、八九年の労働界再編のとき、全労協の旗を振ったものとしての責任感だったと考える。私も思いは同じである。

歴史的には組織的な世代交代なのだから仕方ないことだが、しかし、郵政産業労働者ユニオン長崎のように、彼らの運動を引き継ぎ、さらに若い世代の、そして何よりも非正規の若者が、従来運動では想定していなかった非正規のストライキという手段で、決起していることに、いまは注目し、この路線を共有し、確認すべきである。そしてそれは、七〇年代当時の若者が、反乱ともいえる闘争方式で、多くの闘いを担い、現在の全労協などの組織を作り上げてきたことに通じるものでもある。そこには断絶もないし、対立もないのだ。西日本春闘討論集会こそ、その証明の場であったと私は総括する。今後とも、ともに頑張れるのだ。

、郵政ユニオンの組織統一と本集会。

もう一つの西日本春闘討論集会の総括として行うべき課題に、郵政産業労働者ユニオンの組織統一問題がある。二〇一二年七月に、全労協の郵政ユニオンと全労連の郵産労が組織統一をした。全労協労組として育ってきた郵政ユニオンはどうなるのかと心配の声もあり、また取り込まれるとの危惧も指摘されてきた。

私はこれに対して、同じ相手に挑む、同じ働く者が、同じ闘いを行えば、理解は深まるし、力も倍増するとして、統一への論陣を張って、過去の西日本春闘討論集会でも幾度も、統一しても本集会には参加をし続けると発言してきた。

そしてこの長崎集会に、全国から五〇名近くの郵政労働者が結集して、集会を成功させたことは、この統一が正しいものであることを事実でもって証明して見せたと確信する。ましてや、今年もこの新労組は全国各地でストを打ち抜き、地域労組の運動に励ましを与え続けているのだ。

統一失敗の心配は、過去の運動の対立の結果であり、ある意味、当然であるが、これを乗り越えることこそ必要である。私たちはいまこの地に立っているが、過去に学びつつも、明日の運動を考えるものでなくてはならない。長崎集会のもつ意義は、対立から協調へと舵を切るきっかけであり、確かに深いものであった。

、集会の概要。

これまでいくつかの雑誌や新聞などで集会の経過は報告しているので、多くはくりかえさないが、長崎からの特別報告者の四件は「良かった」と言ってもらえた。長崎の運動を全国に紹介するという立場から、最初に、岡まさはる記念長崎平和資料館運動を理事長で、長崎大学名誉教授の高實康稔先生が行われた。この資料館はいわゆる原爆被害の資料館ではなく、先の戦争加害の国である日本を問う資料館であり、右翼などの妨害も多い。これをしっかりはねのけて闘う長崎が紹介された。

次が、原発再稼働が争点化している中、九州電力で働く人たちや退職者でつくる全九電同友会の川瀬事務局長から、「脱原発」の問題提起を受けた。全国では脱原発を電力労働者たちが行う運動の報告を聞くのは珍しく、「これだけでも聞けて長崎集会は良かった」と言ってもらえた。

さらには長崎県の公務職場で働く非正規労組の野口賢治書記長（元鉄建公団訴訟長崎原告団）が、結成五年で県下の市や町に支部や分会を組織し、組織者は二百名を超えた。差別反対、均等待遇、雇止め阻止で闘っているという。彼によれば、県下全体を組織する労組は全国でも三県にしかなく、まさに長崎の闘いの成果だと思う。

そして最後が、西日本最大の米軍基地を抱える佐世保市の全国一般合同労組から、篠崎正人前佐世保支部副支部長が、反基地闘争と労組活動を闘っていると報告があった。

全国の一四春闘の闘争方針を全労協本部から中岡事務局長が行い、全国各地からも様々な闘いの報告が行われた。なかでも東京から参加したJALの解雇撤回裁判原告団事務局長の鈴木圭子さんからは、「五月の高裁判決でぜひ勝利して、これまでの支援にお返しをしたい」と力強い発言があった。

また夜の懇親・交流会では、参加者全員の自己紹介や決意表明などが行われ、地元実行委員会の手作りによる、持ち込みの懇親会も和やかなうちに行われ、交流が深まった。

、一番の感謝「長崎で開いてよかった」と。

二月の西日本春闘討論集会と三月の非正規のスト。日本の最西端の長崎の小さい出来事であるが、なにか、私自身の長年の心の壁を溶かした二つの闘いであったし、なによりも、全国の百二四名の仲間の長崎遊学は、明治維新を作り上げた若者が、進取の長崎の空気感を感じたのと同じく、体感してもらえたのではないかと感じている。集会参加者から「長崎に来てよかった」と言ってもらえたのが、集会最高の褒め言葉であった。ありがとう、全国の仲間たち。

また集会終了後に岡記念館見学も企画され、二十名の仲間が見学され、支援のための会員への参加ということもあり、記念館スタッフからは「さすが全労協」と感謝の言葉も伝えられた。

、さらに現代の脱藩を

そして、もう一度。

江戸後期の一八〇〇年に、二二歳の若さで、武士を捨て、命を賭して脱藩し（殿様を捨てるのだから見つかる処刑される）広島から京都へと向かい国学（尊王攘夷）を学び、明治維新（開国）の学問的な祖を築いた一人とされる国学者の頼山陽はその著「日本外史」でこう書く。

「武士は最初から武士ではなかった。それまではみんな戦のときに武具をもって集められた農民であり、戦が終わればみんな元の農民に戻っていた。しかし、七八〇年（宝亀十一年）に光仁天皇が「兵農分離」を行い、武士集団が起き、公家を守る武家が生まれた」と。しかし、武力に勝るものといっ

ても、公家の家来であり、命を使い捨てにされる階層であることに変わりはないし、官職も低い。

だから、これに不満を持つ地方豪族の中から平氏が生まれ、源氏が台頭し、ついに武士が天下を取る「いい国作ろう（一一九二年）鎌倉幕府」の誕生である。武士誕生から実に四〇〇年間もかかった。それから、約七〇〇年間の武士の時代で、士農工商という身分格差の時代が続いた。しかしその時代の支配者である武士も、もとはといえば天皇による支配＝最下層の農民であり、そもそも身分差などはなく、階層差別は根拠のないものだったのだ。

そして一五八二年、豊臣秀吉の太閤検地（大增税）以降、三〇〇年間に六八〇回の農民一揆という叛乱＝闘いを経て、一八六八年の明治維新で、ようやく武士の支配は倒れる。歴史によると、薩長土肥の反幕雄藩の集団が、徳川を倒したとするのが正説だが、すでに諸外国は大航海時代と産業革命であり、国を越えて、経済が発展する情勢にあるとき、徳川時代の鎖国と封建的な生産手段では、社会の生産様式の発展に伴わず、国民の不満が爆発する。これに応えきれずに幕府は倒れるのだが、生産とは農民の働きであり、一揆こそ、権力に挑み、歴史を変えた原動力として、その根底に農民の力があるのが、正しいと思う。最下層の農民は自分の身分格差を自分たちの闘いで解放したのである。

武士で四〇〇年、農民や商人で三〇〇年、闘い続けて歴史を変えた。いまの社会は産業革命以降、資本主義の自由主義国家であり、資本家の富による支配が約二〇〇年続いている。しかし日本では、明治以降、今年で一四六年だ。なかでも先の太平洋戦争を画くとするなら、戦後六八年目にしか過ぎない、一面、人権と平和憲法時代だが、これがほぼ三〇年前の新自由主義で逆転、反動に向かう、その中ではさらなる富裕層への富の集中＝規制緩和、労働破壊、非正規制度が強まり、国鉄改革などの大量解雇攻撃、労働運動への大弾圧を経て、いまに続いている。

しかし、日本史を見るまでもなく、人がつくった身分格差は、いつかは倒れる。なぜなら、人がつくった社会的矛盾を抱える制度に正当性がなく、次の時代に必ず変わるからだ。しかし現状がいつ壊れるかは最下層の人々（労働者、非正規）の闘い次第だ。

明治維新よりも六〇年も前の徳川絶対の時代に、社会の矛盾に気づき、脱藩という当時の常識を超えて闘った頼山陽親子（息子の頼三樹三郎は安政の大獄で吉田松陰らとともに処刑されている）や、多くの変化を目指した人たちも、きっと「次の時代がくる」と思ったに違いない。今、だれもが不条理と考える身分格差＝富裕層と貧困層の格差を上げ、人をモノとする非正規制度などは必ず変えられる、との決意で、闘うことが、今の正義ではないか。そしてそのためには、現代の産業報国会の協調派＝多数労組を自分が抜ける＝脱藩し、それに代わる闘う運動と組織を作り出すことではないか。文字通り、現代の働く人の正直な生き方＝組織選択＝脱藩である。

、産業報国会では自分の一貫性が問われる。

私たちは戦前を生きた父母や祖父母らに、「なぜ戦争に反対しなかったのか」と問いかけ、自身は戦後平和主義を支持してきた。しかし、安倍政権は集団的自衛権行使を合法とする戦争政治を強行しようとしている。そんな中、死の商人たる軍事産業は、この政治を会社の利益と国益に合致するとして推進し、それと協調する大労組はこれを受け入れていく。戦前の戦争目前の時代と酷似していて、労組も産業報国会化しているのは、原発推進の労使でも同じだ。

戦前を生きた人に問いかけた同じ言葉を、自分自身に問う時代が目前にある。無論、労組の所属は別にして、闘う人々は真剣に闘っていることは評価されようが、なによりも自分自身として、それを許すのか、こうしたつづやきが耳に響く。そこには闘う人々として生きようと決意した人にとって、人生の一貫性は大切であると聞こえる。

月刊誌「地域と労度運動」4月号（NO162）掲載分です。